

---

# ゆるがく。

五月蓬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆるがく。

### 【著者名】

Z2937C

### 【作者名】

五月蓬

### 【あらすじ】

熱い部活動もなれば、ドラマチックな恋愛もない。  
驚きの事件もなければ、奇妙な噂もない。

これはとある高校の緩くて何事もない日常風景。

何気ない日常風景。あるある?それともねーよ?

ショートものでストーリーはなし、何処からでも飛び出る。

## 俺あんまり勉強してないわ（前書き）

緩い学園もの、略して「ゆるがく。」です。

特別な爆笑も感動もないフラッシュストーリー、それでも良ければ付き合いを。

俺あんまり勉強してないわ

次の時限は数学の小テスト。

たかが小テストだが「赤点取つたら居残り補習だあ」と数学教師の中洲に言われたらクラス中が必死だ。

余裕綽々の最終確認でノートを見直す優等生、柏木。

最後の足掻きでひたすらに教科書の練習問題の答えを手に覚えこませるちょっとお馬鹿なマサル。

そして成績は普通かそれ以下くらいだが、余裕で勉強せずに一つの机に群がる男子三人。

「あーやばいわー。俺、全然勉強してないわー。まあ、赤点回避出来りゃいいかな」

言いつつへらへら笑う中田。

「どうせやつてんだろ。俺はマジでやばいわ。ヤマが外れたら下手したら赤点だわ」

言いつつ教科書は見直さない鈴木。

通称「俺は勉強してないわ合戦」である。

それなりに出来る自信はあるが、特別出来る気もしないので保険をかける見栄つ張り。

点が取れれば「俺つてすゞくね?」、取れなければ「勉強しどきや良かったわー」と言えば面目は保たれるといひ、中堅学生の定番儀式だ。

たまに受験シーズンになつても言つてる奴がいる程の名言だ。駄目なもんは駄目なのにも関わらず。

そんな定番儀式に興じ、馬鹿のレッテルを回避する中田と鈴木。その目の前にはぽかんとしている沢田が座る。

「沢田は勉強したか?」  
「赤点ぐらいは回避したいよな」

沢田は何故か怪訝な表情で二人の顔を見上げる。心なしか青ざめているようにも見えた。

沢田がぼそりと一言。

「……今日つてテストとかあつたつけ?」

中田と鈴木は一瞬無表情になり、そして氣まずそうに咳いた。

「.....なんか.....」めん

「そつか.....」

その日、沢田は一人で補習を受けた。

俺あんまり勉強してないわ（後書き）

一番勉強してないのはテストの存在すら忘れていた人間だというお  
話。

## 質問する生徒

長い間教職に携わり、今では校長として学校中の生徒達に視線を送る私は最近思う事がある。

最近の子供は質問といつものしないのだ。

質問は、と聞いてもしんとする事ばかり。だからといって理解力があるわけでもなく、下らない失敗をする。

失敗は大いに結構。それが成長の糧になるならば。

しかし失敗をしないように努力することは突然のこと。質問もその努力のひとつなのだ。

最近の子供はどうしてその努力をできないのか？残念だがその原因は今の教育、私達にも大きな原因があると思う。

協調や現実という縛りを押し付けて、自主性を蔑ろにする教育。それが今の消極的な子供を形成しているのだと私は思う。

自分で考えることなく、皆同じ事をしろと教えて自主性が育つか？今の教育は享受するだけのものとなつて、自主性など育まない。

だから私は生徒に質問することの重要性を訴え続けている。質問は自主性を育み、自ら学ぶ入り口としてとても素晴らしいことなの

だ。

「先生、何で質問に答えてくれないんですかー。」

「お前なあ……答えられる訳ないだろ？？」

だが困ったもので、教師にもまともに質問に答えられない者がいるようだ。

「藤井先生」

「あ、校長先生」

ノートを手にする女子生徒を前に困った様子の数学教師、藤井先生。

例えややこしい質問をされたとしても、答えないのはいただけない。如何なる労力を割いてでも答えるのが教師の役目だらう。

それに嫌な顔をするのも見過げ」せない。

「藤井先生。生徒の質問には答えるべきですよ」

「いやしかし……」

「せっかく、自分から興味を持つて質問に来たんですね。それを蔑ろにしたらいけない」

藤井先生はさらにも困った顔をした。

まあ、まだ若い先生だ。少しくらいの至らなさを許せなくてどうする。そういう未熟さをただただ咎める風潮が若い世代を萎縮させ

るのだ。

「今すぐは無理でも後できちんと教えてあげてトセヨ、藤井先生」

「いえ、校長先生……それも」

何故か頑なに拒む藤井先生。何故？

「……仕方ない。私も昔は数学を教えてましたから、私が答えましょ」「う」

「本当ですか校長先生…」

女子生徒は嬉しそうに声を上げる。

藤井先生が答えられない質問に、私が答えられるかは分からないうが、せめて生徒に向き合いつ姿勢を示す。

しかし藤井先生は何故か顔色が悪いし、女子生徒に首を振りながら「やめろ」と合図を送っているが……何をそんなに必死になるのか？

「絶対に答えて下さいね！」

「ああ。いつも積極的に質問しなすこと言つているからね。どんなときなさい！」

「校長先生つてカツラですか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2937u/>

---

ゆるがく。

2011年10月8日14時24分発行